



## ＜留学を成功させるための秘訣——留学の枠組み＞

留学を成功させるためには、いろいろな要因が不可欠と考えるが、以下、おおまかにハード面とソフト面との視点に分けて、英語コミュニケーション学科が心がけていることを披露してみたい。まずはハード面である。

### ①PDCA サイクルを使ったプログラム改善システム

留学プログラムに参加する学生は毎年変わるわけだが、事業自体は継続して進めなければならない。事業目的に大きな変化がなくても、カリキュラムや教育方法、施設等に関しては点検評価が必要だとの観点から、留学プログラム実施後毎回、実施側の視点による自己点検評価、および参加学生側からのアンケート、参加学生が受験する英語力客観評価の成績を基にして、当該年度の分析や経年比較を行い、取組の見直しを図っている。問題点や課題が見つかった場合は改善の方策を立て、次の取組に活かしている。

### ②安心安全な留学

留学を成功させるためには、学生や家族に説明責任を果たし、保険・緊急時対応・警備等、安全面に強い信頼を抱いていただくことが欠かせない。最良かつ安心できる学習・生活環境を提供するべく力を注ぐ必要がある。

#### a) 警備面・施設面

昭和ボストンでは開校以来 22 年間、24 時間警備の万全な体制を敷き、事件事故を未然に防いでいる。施設設備に関しても、定期的な点検の他、逐次修理、新規更新を適宜行っている。

#### b) 生活面

昭和ボストンではファカルティメンバーの他に学生サービス部門に属するスタッフを抱え、学生生活の良好な環境維持に努めている。健康面・保健衛生面における不安や心配は多くの学生や家族が抱えるものなので、学生サービスに常勤のナース 3 名、カウンセラー 1 名を配している（ナース 3 名のうち、2 名は日本語を母語とし、アメリカ生活の長い者、カウンセラー 1 名は日本語を母語とし、アメリカで教育を受けた者）。昭和ボストンでは現地医師を校医として置いている他、現地日本人医師とも連絡が取れる体制を整えている。

#### c) 事務関連のオリエンテーション

オリエンテーションはおよそ半年かけて行う。内容は教育面（後述）と事務手続き面とに分けている。事務手続き面に関しては、健康調査（持病やアレルギー、大病歴など）、マサチューセッツ州で求められる予防接種等の証明書（未接種の場合はスケジュールを立てて受けさせる。抗体検査も含む）、ビザ申請書、留学費納付方法申請書等の各種書類の回収の他、大使館面接、保険申込などを遺漏なく行っている。学生の個人情報にかかる内容が多いため、本学の個人情報保護に関する規程に従い、細心の注意を払って情報を扱っている。健康面等の情報は学生サービススタッフとも共有するが、限定された者だけが扱えるようにしている。留学に影響が及びそうな持病を持っている場合は、かかりつけ医師とボストン現地医師（日本語を解する者）とが事前に協議し、薬や治療法に関する相談を行うこともある。

保険に関しては、必要事項を一定の補償額以上でカバーするプランを 3 種用意し、その中から契約プランを選ぶよう強く奨励している（学生によっては、特定の保険会

社と契約したいという希望があったり、すでに相応の保険に加入していたりする場合があるので、義務化するところまでは及んでいない)。現地で緊急事態が発生した時、当該学生の保険内容を確認してから治療の諾否を考える時間がない場合があるので、このようなやり方には、緊急時対応しやすいメリットがある。

#### d) 学生・家族からの要望対応

学生本人もしくは家族から要望や改善提案をいただいた場合は、現地教員やスタッフと協議の上、迅速に検討・対応している。迅速な窓口対応も安心安全に関するひとつの重要ファクターである。

#### ③情報提供

学生および家族に対しては、適切な時期に必要なかつ十分な情報を提供できるよう心がけている。学生と家族を招いて行う留学説明会は入学直後に行う。この説明会では、3種の留学プログラムの各目的と実施概要、概算費用等を説明した上で、質疑応答を行う。説明会後には個別の質問にも対応している（なお、配布資料にはFAQを付けている）。入学後、学生へは、プログラムごとに概要説明会、オリエンテーション、先輩との交流会を設け、家族に対しては主に文書配信で情報を提供している。その他、電話による質問に対しても事務方が対応しており、質問内容によっては教員から回答するようにしている。

留学中の様子に関しては、現地から学生が発信するブログ（一般向けと公開範囲を制限した家族向けの2種）の他に、現地教員によるアカデミックレポート、学生サービスタッフによる学生生活レポート（レポートはいずれもmid-termおよびend-termの2回）を日本語に翻訳して家族宛てに送付している。

情報提供は近年家族側から質量両面で強化して欲しいとの要望が強まっており、安心安全を謳う意味においても、これまで以上に積極的な取組が欠かせないと考える。

### <留学を成功させるための秘訣——自律型学生の育成>

次にソフト面である。必修で留学する学生の場合、入学前から動機づけられていて、正の方向へ留学の期待が高まっている学生が多いとはいえ、中長期にわたる留学（2週間から1カ月の留学は短期とみなす）においては精神的にも身体的にもタフであることが求められる。留学を成功させるためには一層の動機づけを図る事前の指導が欠かせない。

#### ①自律型学生の育成

留学参加時期の違いや個人の成熟度の違いはあるが、個々が最大限の留学成果を上げるためには、学生自身が自律的になっていることが肝心である。英語コミュニケーション学科では、「It's up to you!」をスローガンとし、「目標設定ができる」、「目標達成のための計画策定ができる」、「計画に沿って実行できる」、「自分の行動を記録することができる」、「自分の記録した足跡を振り返ることができる」、「いろいろな角度から原因や問題点を考えることができる」、「必要な情報を選択・整理し、次へ活かすことができる」、「人に頼らず、面倒がらずに仕事や役割を引き受ける」、「頼まれなくても、一歩自分から踏みこんで挑戦する」ことができるよう、繰り返し学生に説いている。またもうひとつ、「Be positive!」というスローガンも掲げ、「夢を持つ」、「意欲や野心を持つ」、「偏見を持たずに相手を尊重する」、「誰とでも気持ちよくつきあう」、

「ポジティブなことばを使う」、「アサーティブである」、「前向きに考え、新しいことに挑戦する」、「苦しいことがあっても、あきらめずにやり遂げる」、「自分の魅力や長所を見つけ、伸ばす」、「自分に自信を持つ」、「落ち込んだ時に自分を励ます」ことができるよう、これもまた繰り返し学生に説いている。

自律型学生を育てる観点から、現地滞在中の寮生活は学生主体に組織化している。学生はおよそ25名ごとにウイングと呼ばれる寮棟に分かれ、2人1部屋（もしくは4人用の部屋に3人1部屋）で集団生活を送る。英語コミュニケーション学科の場合、マクロ的に見れば、同じ大学・学科に通う同世代の同性としてかなり均質な集団を形成しているわけだが、個々に見れば価値観や生活習慣がかなり異なる者も存在する。学生の対人関係能力強化、コミュニケーション力向上、自律的な力の育成のため、個室制を取らず、すべての部屋を相部屋とし、ルームメイトの選択も学生の希望制とせず、アルファベット順に機械的に決定するようにしている。学生は既に履修した授業等で人間関係を築いているので、初対面のルームメイトとなる確率は比較的低い。スタート時の人間関係としては、とても仲の良い友人ではないが、顔見知りである、といった程度である。

ひとつの寮棟には、ウイング・リーダーとアシスタント・リーダーを一人ずつ置き、リーダーは、寮棟ごとに世話役として配されたRA (Residents Assistant) 2名と協力しながら、寮棟ごとの活動に関して責任を持ってコーディネートし、実践する。寮棟にはフェローと呼ばれる本学卒業生も滞在している。フェローは現地大学や大学院に通う良き先輩であり、後輩たちのロールモデルとなり、範となれる者である。

寮において問題が発生した時は、原則的に自分たちで原因究明・問題解決に当たらせている。ただし、問題によって学生サービスのスタッフが支援することは言うまでもない。学生には、協調型コミュニケーション、グループディスカッション、アサーティブトレーニング等を事前に行っており、自らの意見を持ち、それを主張し、議論の上で最良の結論を導くことができるよう、考え方とスキルとを訓練している。寮棟をベースとした生活においては、基本的なルール以外は、自分たちの話し合いにより約束事を決められるようにし、責任ある行動を取れる人の育成を目指している。

学生組織のリーダーとして、プログラムごとに参加学生全体の中からステューデント・リーダー、サブ・リーダーを一人ずつ選ぶ。これはウイング・リーダーのような生活組織上のリーダーというよりは、全体のまとめ役・セレモニー等の代表学生役であり、役割が異なる。

## ②教育面のオリエンテーション

留学参加者に対し、事前に英語力を強化するカリキュラムを学ばせるのはもちろんである。参加前のセメスターは、英語集中講座に近いカリキュラムを作っている。参加するプログラムによって異なるが、学生は1から3セメスターの期間、英語集中講座を受けてから留学することになる。

留学前カリキュラムの中には、「SAP (Study Abroad Program)」、「米国事情」、「ニューイングランド研究」という特色ある授業を設けている。これらは、ボストン留学に向けて知識や考え方、態度等を養うための講座である。「SAP」は今年度、近現代の日米関係、アメリカンスピリットと日本人の精神構造、ボストンとゆかりのある日本人、日本人の生活様式（衣食住）、日本の伝統芸能とサブカルチャー、ボストン美術館

と日本芸術、コミュニティサービス、集団生活におけるメンタルヘルス、外国における生活、海外留学のためのIT知識とスキル、異文化体験とカルチャーショック、セーフティ&ヘルスウェアネスといったテーマを盛り込んでいる。それぞれの専門家を招いての講義となるが、心身の健康面に関しては特に、学生相談室カウンセラーや栄養士をお呼びしてわかりやすい講義を展開している。「米国事情」は、アメリカで現在議論されている問題を、アメリカおよび西洋文明全体の視点から考察する講座で、アメリカの大学教養課程でひろく使用されるテキストを使う。「ニューイングランド研究」は、ボストンおよびその周辺の歴史や文化、風俗を教える講座である。これらの講座によって、留学そのものへの意識が高まることを期待している。

学生は、留学直前のセメスター中に、ゼミ教員の指導を受けながらステートメント・オブ・パーパス（心構え）を書く。留学の目的や留学中の計画を自ら考えさせ、文章にして手許に残し、留学中も留学後も初心に戻れる材料とすることも狙っているが、自覚を徹底させるべく、考え方の甘い学生にはゼミ教員が繰り返し書き直しを求めている。

留学前のオリエンテーションには特別版も設けている。これは、昭和ボストンから教員およびスタッフを呼んで行うものである。新情報や変更点がない限り、説明内容は毎年それほど変わらないが、現地の関係者による説明は学生のモチベーションを向上させることに大きく寄与する。また、同様の主旨で、ボストン留学を既に終えた先輩学生との交流説明会を開いたり、現在ボストン留学中の先輩からメッセージをもらったり、学生間の接触機会を多く設けている。人数に制限のあるBLIPに関しては、こういった機会が縦のつながりを作ることに役立っている。

出発前には、学長・学部長をお呼びして出発式を行う。教員からのメッセージに加え、学生のリーダーによる宣誓もあり、グループとしての一体化・意識づけの再確認ができるようにと考えている。

最後に、「自己省察の機会を増やす」「個別相談を行う」「自信を与える」ことも忘れてはならない重要なポイントである。振り返りや反省の機会が多いほど目的意識が明確になり、モチベーションが向上する。全体説明での理解が困難な学生もいるので、個別相談の機会を多く設けると情報の周知徹底やアドバイスに効果的である。自信を持たせることが、一歩前に踏み出すきっかけとなることは言うまでもないだろう。以上が、経験則に基づいて本学科が考える「海外留学の効果的なアドバイジング」である。読者諸賢のご質問やご意見は大歓迎である。今後も、大方のご支援・ご鞭撻を願ってやまない。



昭和ボストン俯瞰